

---

# 私がDJになる時

雅治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私がDJになる時

### 【Nコード】

N1190D

### 【作者名】

雅治

### 【あらすじ】

いじめられて、登校拒否になっていた中2の女の子が、ある出会いをきっかけに、いろいろなことを学んで、真の自分になっていく…。

## CAST (前書き)

このお話は、いじめと長崎の原爆投下について考えると言う小説です。

この小説が、いじめや病と戦う人たちの励みになってくれれば光栄です。

# CAST

登場人物  
 四王寺 宝珠 しょうじ ほうじゅ  
 永星 優輝 えいせい ゆうき  
 赤司 賢優 あかし けんゆう  
 飛鳥 大和 あすか やまと  
 五十嵐 一人 いがらし かずひと  
 石塚 理乃 亜 いしづか りのあ  
 岡本 厘雄 おかもと りゆ  
 鹿島 直人 かしま なおと  
 鐘ヶ江 淳 かねがえし じゅん  
 鐘ヶ江 卓 かねがえし たく  
 黒沢 撥春 くろさわ はつはる  
 小坂 隆翔 こさか りゅうしょう  
 五条 都果 紗 こじょう つかさ  
 近藤 弘樹 こんどう ひろき  
 坂本 風吹 さかもと ふぶき  
 城西 彰 じょうせい あきひろ  
 白浜 元気 しらはま げんき  
 新宮 青龍 しんぐう せいりゅう  
 大名 友貴 だいみょう ともたか  
 仁和寺 雅貴 にんなじ まさたか  
 柊 翼 ひいらぎ ときはな  
 日向 嶽 賭 ひやうが がくと  
 平原 亮 ひらはら りょう  
 平川 亮 ふるかわ あづま  
 古川 杏津 磨 かつら けい  
 美月 律知 みつき りつち

## 序章：誓い（前書き）

この章は、まだ序章ですが、必ず読んでもらいたい章です！

## 序章：誓い

### 序章：誓い

私は、一人の男性にこれからの人生を180度変えられました。

この男性と出会っていなかったら、私は自分を失って、自殺していたかもしれません。

そんな命の恩人…いえ、人生の師匠と言っても過言ではないこの人に、私はどうやって恩返しをすれば良いのか分かりません。

その人が最後に残してくださったモノは、とても大きくて、温かいモノでした。

その人は、あったその時から私のことを理解してくれました。

いじめの辛さ、心に負った傷の痛み、そして悲しみも…。

だから私は今ここに生きることが出来ています…。

私は、その人こそ、限りなく神様に近い人だと思います。

今はもうこの世にいないその人に対して、今から私ができること…。

それは、自分として自分らしく、強く生きること…。

そして、あの人から託された全てのものを全うする事…。

それだけなのかもしれません。

だから私は生きようと思います。

精一杯…まだ、到着場所は決まっていけないけど…。

振り向かないで、立ち止まらないで、寄り道しないで、自分を信じて進んで行こうと思います。

だから…もう一度…もう一度だけチャンス을ください。

私、四王寺宝珠は、あなたの意志を引き継ぎ、DJユウキとして生

きていきます。

そして、いじめや病で苦しむ人たちに、優輝と希望の光を与えられるような音楽を奏で続けることを誓います。

私は誓います。

私はもう泣かない…。

絶対負けない！！

## 序章：誓い（後書き）

次章からはいよいよ本編に入ります。

主人公が、主人公の人生を大きく変えるあの人に会う一番最初のきっかけに遭遇するシーンです。

お楽しみに！



第1章：止まらない涙…（前書き）

いよいよ本編に入ります。

主人公はいじめを受けているようで…。

## 第1章：止まらない涙：

第1章：止まらない涙…。

「あんたさあ、ホントウザいんだけど。さつさと死んじゃええあ？」  
「キモイ。近寄るなっつうの！キモ菌がうつたらどーしてくれるワケえ？」

こう言う事言われるのは、もう当たり前…。

物を隠されたり、落書きされたり、足を引っ掛けられたり…。

私は所謂『いじめ』に遭っていた。

そして何時の頃からか、私はもう学校に行かなくなっていた…。

私は今、公園をぐるぐると、唯、只管走っていた。

何で私が…何で私だけ…何で私ばかり…こんな事されんといかんとよ…！！

1週2kmの公園を、悲しみ、怒り、憎しみを込めて走る。

そうすることで、決して癒えない心の傷口を、無理矢理締めようとしていた。

そんなことしても何も変わらないことぐらい分かっていた。

でも私にはどうすることも出来ないから…。

こうするしかなかった。

何周目か分からなくなってきた頃、ベンチに座って楽しそうに話している、私ぐらいの男の子と女の子は目に入った。

「それってアレやん！うわー。絶対有り得なかるー？」

「ホントだつてえ！！マジびっくりしたっちゃもん！！」

良いなあ…、私もあんな風に友達と話したりしたいなあ…。

そう思いながら立ち止まって、その二人を見つめていたら、学校での出来事が蘇ってきた。

「ねえ、見て。まだ来たわよ。」

「よく来れるよねえ。ホントバツカじゃないの？」

「あははは…。アンタがいなくなっただって、誰も悲しまないって。だから安心して死んでいいからねー。」

そしたら、その二人までが、私の噂をしながら笑っているような感覚に襲われて、恐くなって、私はその場から早く離れようとまた足を動かし始めた。

でも、パニックになった私は、足が纏れて、その場に転んでしまった。

「いつ、痛っあ…。」

私のその声に、その二人が私の方を見た。

卓：「おいおい、大丈夫かあ？」

やだ…来ないで…。

厘雄：「大丈夫？立てる??」

誰か助けて！！

二人は私のことを心配してくれてるんだ。

でも、今の私には、そんなふうには見えていない。

女の子が手を差し延べてくれた。

けど、私には、刃物を持った、あのクラスメートに見えてしまって、遂に叫んでしまった。

宝珠：「やあっ！！来ないでえ！！ほっといてっ！！もう関わらんでえー！！」

すると男の子が、私の肩を揺すってこう言った。

卓：「ほっとける訳無いやろうが！！自分の目の前で人が血い流して倒れとるとやぞ！！ほっとく人間が何処におるとかちゃ！！」

そう言われて、私が顔を上げると、今度ははつきり二人の顔が見えた。

宝珠：「ご、ごめんなさい…。私…。」

涙が止まらない…。

こんな私にでも、優しく接してくれる人が、家族以外にもいたなんて…。

そう思ったら、嬉しくて涙が止まらなかった。

第1章：止まらない涙…（後書き）

次章は、しばらく味わうことの出来なかった温かさを主人公は手に入れます。

次章もお楽しみに！

## 第2章・温かさ。(前書き)

主人公が、過度のいじめによって失っていたものを取り戻します！

## 第2章：温かさ…。

第2章：温かさ…。

厘雄：「あーあ。泣いちゃったあ。卓のせいだよ。あんな言い方しなくても良いのにさあ。可哀想じゃんかあ！！」

泣いている私を見て、女の子が男の子に言った。

卓：「はあっ！？俺かよっ！！って、俺しかおらんよな。悪い！俺、口悪かけん。」

男の子が私に頭を下げてきた。

宝珠：「ち、違います！！貴方のせいじゃないです！わ、私、いじめられてて、学校行つてなくて、それで…、こんな私にでも優しくしてくれる人がいたんだなあって思ったら、嬉しくて…。」

厘雄：「そっかー。なあんだ。卓のせいじゃなかったんだあ。良かったねー。」

女の子がそう言つて、男の子の肩を叩いた。

卓：「そ、それより、足、見せてみい。血い出とるとやる？」

男の子が話を逸らすように言った。

私は、おそろおそろ足を出した。

厘雄：「うひーい…痛そう…。」

卓：「派手にやったとやなあー。痛かろう？」

血が流れて膝は真っ赤…。

痛くないといえば嘘になるけど、はつきり言つて痛すぎて感覚が無い。

卓：「何かあれば良いとやけど…。」

男の子がポケットからハンカチを取り出して、私の膝の傷を抑えながら言った。

厘雄：「はいはい！厘雄はあ、救急セット持つてまーす！！」

女の子が手を上げて、得意そうに言った。

卓：「準備良いとやね。早う貸しんしゃい。」

厘雄：「はいー!!」

女の子がカバンから消毒液らしきものと包帯、ガーゼを取り出して、男の子に渡した。

卓：「取り敢えずは応急処置たいね。」

男の子は手際良く膝を治療してくれた。

宝珠：「ありがとうございました。何か迷惑かけちゃって。」

厘雄：「ううん。迷惑なんて、そんなこと全然ないよー。だって友達でしょ？」

女の子の言葉に、私は動揺した。

宝珠：「友達？何で？私達、会ったばかりだよ？」

そう私が言っても、女の子は笑顔のままこう続けた。

厘雄：「会ったばかりだったら友達じゃないの？そんなこと全然関係無いと思うけどなー。だってね、優輝が言ってたよ。『人は出会ったその時から友達なんじゃよ。』って。」

宝珠：「優輝？誰？」

卓：「優輝って言うんは、俺たちが組んどるバンドのリーダーとよ。」

宝珠：「へえ…。そうなんだあ。すごく素敵なこと言う人とやね。その人。」

そげん人がまだ、この世におったとやね…。

私はその『優輝』と言う人に会ってみたくなった。

厘雄：「すっごくカッコEよ。厘雄の憧れの先輩だもん!!」

宝珠：「厘雄ちゃんはその人が大好きとやねえ。」

私がそう言つと、男の子が吹き出した。

卓：「ぷっ…あははっ!!厘雄ちゃんだってえ!こいつな、こげん見えるそばってん男とばい。マジ有り得んたいね。信じられんかろ



？」

宝珠：「えっ？え…えええーっ！！ホント？」

厘雄：「うん ホント。厘雄は男の子だよー。」

女の子の思っていたその子は女の子ではなかった。

宝珠：「ご、ごめん…。美少女クラブとかにいそうな顔だし、声も深夜アニメの萌えキャラみたいいな声だし、名前も…。私、女の子と  
思ってたー！！」

厘雄：「いいよー。いつものことだー！！ところで自己紹介まだ  
だったよね。俺、岡本厘雄。厘雄でいいからねー。で、こっちが鐘  
ヶ江卓だよ。君は？」

宝珠：「私は、四王寺宝珠。よろしくね。」

私は軽く会釈した。

厘雄：「ところで宝珠ー。宝珠は優輝に会ってみたいくない？」

会ってみたいと思っただ人に会えるの？

会いたくない訳無いっ！

この目で確かめたい。

ホントにそんな人がいるのかどうか…。

宝珠：「会いたかー。会わしてくれると？」

厘雄：「うん いいよー。卓、宝珠さ、優輝に会いたいんだって。

一緒に行ってもいいでしょ？」

厘雄が、卓の着ているＴシャツを引っ張りながら強請る様にして言  
った。

卓：「分かった分かった。って、何で俺に聞くとか！好きにすれば  
良かやる？俺に権限無いとやけんね！」

厘雄：「やったあ！行こ行こー。」

厘雄が私の手を引っ張って走り出す。

宝珠：「待って！そげんに引っ張らんで良かよ。ちゃんと行くけん。

ー

卓：「そおたい！こいつ、足ばケガしとるとやけん、そげん引っ張  
ったらまた転んでしまっばい。」

厘雄：「そか、ごめん。」

宝珠：「やだあ、本気にした？うそうそ、気にせんでよかばい。行こ！」

厘雄：「やっと笑ってくれた。女の子は笑ってる方がずっと魅力的だと思うから、ずっと笑ってほしいなあ…厘雄は。」

宝珠：「分かった。じゃあー、厘雄のために、笑つとこうかなあー、私。」

厘雄：「ホント？やったねv」

私が望んでた事…。

良いなあ…、私もあんな風に友達と話したりしたいなあ…。

こうして楽しく話して、ちょっと冗談が言える、温かい人間関係が欲しかった…。

私は、今まで失っていた温かさを感じることが出来た。

## 第2章：温かさ…。（後書き）

次章、遂に主人公の人生を変えてしまうあの人の登場です！！

### 第3章：出会い…。（前書き）

公園で出会った少年達に連れて行かれた場所で、主人公は、今まで一番会いたかった人に会うことになって…。

### 第3章：出会い…。

第3章：出会い…。

私は、厘雄と卓に連れられて、あるライブハウスに到着した。

宝珠：「ここは…？」

厘雄：「ここー。ここがね、厘雄たちが活動してるトコだよ。」

宝珠：「そうなんだー。」

厘雄：「うん。入って入ってー。」

厘雄がドアを開けて、勢い良く手を振る。

厘雄：「優輝！いい！ただいまー。」

優輝：「おお、厘雄、早かったのう。もうちょっと遊んできても良かったとよー。」

『優輝』と呼ばれた人の声が奥の方から聞こえてくる。

厘雄：「優輝！いい！聞いて聞いてえ。今日ね、お客さん連れてきたのー！」

優輝：「お客さん…？」

そして、その『優輝』という人が奥から出てきた。

厘雄：「宝珠って言うの。」

優輝：「そうね。じゃ、自己紹介とかんといかんのう。俺は、永星優輝。しくよろ。高2じゃけん、多分年上じゃと思うけど、優輝でいいぜよ。」

そう言つて、その人が左手を差し出す。

宝珠：「は、はじめまして！四王寺宝珠です。中2です。よろしくお願いします。」

私も左腕を差し出して握手をする。

優輝：「まあ、何もないとこじゃけん、ゆっくりしていつて。」  
ニコッと笑うその優しい笑顔は、私の心の傷を一瞬にしてかき消した。

優輝：「何か飲むか？何が良かと？」

宝珠：「い、いえ…そんな、お構いなく。」

優輝：「そんな遠慮せんでも良かじゃろ？友達なんじゃけんが、何をそんなに遠慮する理由があるんよ。」

厘雄の言うとおりだ…。

この人は、初対面の私を友達だつて思ってる…。

宝珠：「ご、ごめんなさい…。」

優輝：「別に気にせんで良かよ。それから、その敬語止めるんしやい。俺は敬語っち嫌いなんよ。じゃけ、正式な場所以外は絶対俺使わんばい。」

厘雄：「そうだよー。敬語なんか止めちゃえー。」

厘雄が、オレンジジュースを両手に持つて来た。

厘雄：「宝珠が遠慮するから、勝手に厘雄の好みでオレンジジュースにした。」

優輝：「ほらあ、宝珠がちゃんと言わんと、お互いに気い使わんといかんくなるじゃろ？だけん、いらん気使わんでいいんぜよ。他で使わんといかんとしても、ここでは使わんでいいと。OK？」  
気持ち嬉しかった…。

けど…こういう言葉、何度も言われたことある…。

宝珠：「で、でも…私…。」

卓：「何でそうやって、自分から殻の中入ろうとするとよ。学校で何があつたが知らんばつてん、ここでは誰もお前ん事苛めたり責めたりせんから大丈夫たい。」

卓の言葉が私の心に突き刺さった。

私は、やっぱり心のどこかで厘雄たちを信用していなかったんだ…。そんな自分が情けなかった。

こんなにも優しく接してくれる人たちまでも、いつの間にか信じる事が出来なくなっていた自分…。

最低だよ…。

優輝：「あのさ、もし宝珠の心が許せばでいいんじゃが、溜まっと

おモン出してくれんかのう？俺に全部話してほしいんじゃ。話すが無理じゃったら、俺をその相手じゃっち思つて、そのまま言いたいことぶつけてみんしゃい。」

厘雄：「そうだよ。言っちゃいなよ。楽になると思うよ。厘雄たち、宝珠の味方だから！」

みんなの言葉に、今まで溜まっていたものが一気に湧き出てきた。

宝珠：「…なん…で…、何で！何で…。何で私ばかりこんな目に遭わなきゃいけないの！？私…何かした？何でこんなに苛められなきゃいけないの！？もう行きたくない！学校なんか！死んじやいたい…。もう耐えられないの！もう無理なの！」

そう喚いた瞬間、優輝に抱きしめられた。

宝珠：「ゆう…き…？」

優輝：「よお勇氣出して言ってくれたの…。残念じゃが、お前の学校まで踏み入ってそいつらに文句を言いに行くことはできん。じやが、ちゃんとお前の思い、辛さ、悲しさは俺には伝わったけん。もう大丈夫ぜよ。ここにおれば、お前のことを苛めたりする奴は絶対におらんよ。約束するたい。」

優輝の温もりが切なくて、苦しくて、でも嬉しくて…。

私はもうみんなが見ていることなんて忘れて泣いていた。

優輝：「辛かったのう…。よお我慢した…。ええよ。泣きたい時は泣きたいだけ泣きんしゃい…。」

私は幸せだと思う…。

こんなにも私のことを理解してくれる人がいて、受け入れてくれる人がいて…。

私は、この出会いで、自分は幸せだと感じる事が出来た気がする…。

### 第3章・出会い…。（後書き）

次章は、主人公がみんなの仲間入りをします！！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1190d/>

---

私がDJになる時

2010年11月27日20時37分発行